

初年次教育における協同学習を利用した授業研究

石橋裕子

東京福祉大学短期大学部(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

(2010年6月3日受理)

抄録:本研究は、T大学1年生に対して、「音楽I」の授業を協同学習の手法を利用して実施した報告である。春学期の授業はペア学習、秋学期はLTD話し合い学習法を実施した結果、以下のことが示唆された。春学期の「音楽I」では、「コミュニケーション能力と学習意欲を高める」授業作りはおおむね達成できた。しかし問題点として、①学習意欲は高まったものの、理論や実技の成績が著しく伸びたとは言えないこと、②学習意欲の向上が高い理解度には結びついていないこと等が明確となった。秋学期「音楽I」では、目標の課題はおおむね達成できた。問題点として、①予習で必ず学習すべき項目を指定しなかったこと、②演奏する上でなぜ理論の学習が必要なのか等細かい指示が出せていなかったこと、③そのため、課題によってミーティングがスムーズに進まなかったことが明確となった。

(別刷請求先:石橋裕子)

キーワード:大学初年次教育、協同学習、ペア学習、LTD話し合い学習法、音楽I

緒言

初年次教育は、大学1年生に対して行われる教育プログラムであり、アメリカで1980年代から導入され始め、現在では世界20ヶ国以上に広がっている。日本で取り込まれるようになったのは、「早い大学で1990年代後半」(友野, 2010)のことである。初年次教育は、多くの大学でその重要性が認識されている。山田・森(2009)によれば、文科省の統計でも初年次教育の実施は、2006年度で501大学(71%)、国立大学では67大学(77%)となっており、現在は、さらに増加しているものと思われる。

2008(平成20)年3月に公表された中央教育審議会(以下、中教審)大学分科会制度・教育部会の『学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)』(以下、審議のまとめ)では、大学が取り組むべき改革の方策として、「学びの動機付けや習慣形成にむけて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置づける。」「大学や学生の実情に応じて、補習教育(リメディアル教育)の充実に向け、取り組む。」「幅広い高校生を対象に地域の実情に応じた連携事業等、高大連携の様々な取り組みを一層推進する。」「(中教審大学分科会制度・教育部会, 2008a)が挙げられている。

一方、中教審『答申』では、初年次教育の内容について、「レポート・論文等の文章技法」「コンピュータを用いた情

報処理や通信の基礎技術」「プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法」「学問や大学教育全般に対する動機づけ」「論理的思考や問題発見・解決能力の向上」「図書館の利用・文献検索の方法」等が重視されているとしている(中教審大学分科会制度・教育部会, 2008b)。このことから、松本(2009)は、日本の初年次教育の主な目的は、「大学生として生活、勉学をしていくために必要な知識とスキルを獲得することと考えられる傾向が強い」と述べている。

青野(2008)によれば、初年次教育においては「学習動機づけ(学習意欲)」が重要な目的であり、水原(2001)によれば、「コミュニケーション体験」を考慮することに有用性があり、また杉江(2004)は、教師と学生の双方向に加えて、さらに学生相互のやりとりを含む三方向の授業が有効であると述べている。

そこで、初年次教育に有用だと言われるコミュニケーション能力と学習意欲を高めることをめざして、アメリカ・ミネソタ大学のジョンソン兄弟(Johnson, D.W. and Johnson R.T.)が中心になり開発・研究してきた協同学習(Learning Together)(Jacobs et al., 2002; 関田, 2004; Elizabeth et al., 2005)の考え方を取り入れた「ペア学習」を春学期に、アメリカ・アイダホ大学のヒル博士(Hill, W. F.)が考案した協同学習の一技法である「LTD (Leaning

Through Discussion) 話し合い学習法」(Rabow et al., 1994; 安井, 2006)を秋学期に実施した。

本稿では、実践系科目では取り入れることの少ない「協同学習」の考え方に基づいた三方向の授業を中心とした一斉授業ではない形態での講義実践を通して、授業としての初年次教育について論じる。

T大学での「音楽」の授業

背景

小学校・幼稚園教諭、保育士資格等の取得に実践科目、とりわけ「音楽」は欠かせない。養成校での音楽授業の多くは、「音楽Ⅰ」等で音楽理論や声楽等の基礎技能習得を目指した講義を、「音楽Ⅱ」等でピアノを用いた弾き歌いや合奏等の講義を展開している。セメスター制を実施している大学が多いため、半期ごとしか開講せず、「Ⅰ」「Ⅱ」合わせても30回しかない大学が少なくない。多くの養成校は、理論に関する事項は「一斉授業」を、実技は複数の担当者が数人ずつを担当しての「レベル別個人指導」を中心に行なっている。

T大学の「音楽」は単独担当である。講義内容や使用教材等は統一されておらず、担当者ごとに異なった内容や教材を使用している。筆者(石橋, 2009a, b)は「ペア学習による『音楽Ⅰ』の授業実践」について発表した。多くの養成校の音楽教員から「ピアノを指導する科目での単独担当事例は聞いたことがない」との意見を聞いた。このことから、実技指導は、複数の担当者が数人ずつを教授する方法が多く取り入れられているといえよう。

単独担当を複数担当の授業形態と比較すると、学生一人ひとりに丁寧な指導ができにくく、学習意欲・技術力の向上も望みにくい。なぜならば、入学後初めて鍵盤楽器を学ぶ学生が少なくなく(春学期36%、秋学期35%)、アドバイス事項も多岐に渡るからである。そのため、指導に要する時間が経験者に比べて大幅に多く、講義時間内に履修者全てを「個人教授形式」で指導することが非常に難しい。講義時間中、指導を受ける時間よりも一人で練習する時間(自習)が圧倒的に長い上、自宅等での練習成果を確認してもらえない学生は、次第に学習意欲が低下する。一方、鍵盤楽器経験者の指導に費やす時間が少なくなる分、彼らの技術力を引き上げることも難しくなる。オフィスアワーや空き時間、毎日の昼休みを全て費やしての指導にも限界がある。実習施設や採用施設等からは「音楽実技面での技術が劣っている」等の声が聞かれた。そのため、一人ひとりに時間をかけ丁寧な指導をするためには、学生の「自習」状態を減らし、学生同士で学習意欲を高める方法を取り入れる

必要があると考え、音楽ではあまり行われていない小集団での学習を実技に取り入れることとしたのである。

春学期の授業実践例

1) 学生の状況

実施学年は、2009年度S学部1年生96人で、保育士資格、幼稚園教諭免許状や社会福祉士資格等の取得を目指す学生であった。1クラスは約25人、各クラス男子学生が10人弱在籍していた。

高等学校で「音楽」の未履修者は全体で29%、1クラスは89%が未履修者であった。鍵盤楽器の「経験あり」が64%、「経験なし」が36%。経験のある者となない者が50%ずつというクラスがあった。ピアノ実技のグループ分けは、上級者12%、中級者39%、初級者49%。6人以外が全員初級者(76%)や初級者と中級者が各12人というクラスもあった。

2) 授業の概要

授業は、前半と後半とに分けて実施し、詳細は、「第1回 オリエンテーション、音楽歴調査」「第2回 音楽理論確認調査、ピアノ実技グループ分け」「第3回～10回 前半45分/音楽理論、後半45分/ピアノ実技」「第11回 音楽理論およびピアノ試験」「第12回～14回 前半30分/コード伴奏法、後半60分/ピアノ弾き歌い」「第15回 弾き歌い試験」であった。

ピアノやピアノ弾き歌いの実技では、カルテとレッスンノートを使用した。カルテは指導者(筆者)が、レッスンノートは学生が持った。曲が仕上がったらレッスンノートに指導者印を押し、カルテに学生の練習の成果等を記録した。

第1回の音楽歴調査は、カルテの所定欄に記入させ、一人ひとりの音楽経験を把握すると同時に、ピアノグループ分けの資料とした。第2回の音楽理論確認調査は、義務教育で学んだことをどのくらい覚えているのかを問うテスト形式で行い、講義組み立ての参考資料とした。

実技のグループ分けは、カルテの音楽歴や本人の希望等をもとに、初級・中級・上級の3グループに分け、それぞれ異なった教材を使用して練習した。特にピアノ初心者、周りに弾ける学生がいると、そのことだけで不安を覚えることが多いため、レベルごとにまとまって着席させるよう配慮した。

3) 授業の実施方法

音楽理論：①授業では自宅学習で作成した「予習ノート」(様式自由)や「ペアワークシート」等を使用。②毎時間違う人とペアを組み(2人または3人)、役割分担(2人ペアはAまたはB、3人グループはAまたはBまたはC)。③予習してきたことを、教科書を用いず「予習ノート」や「ペアワー

クシート」の予習欄の記入事項を中心に、1分ずつペアと「情報交換」。④筆者が、「情報交換」で話題になっていた情報や最低限必要な事項等を「情報提供」。各自ノートに、後で口頭説明できるように「自分のことば」を用いて記録。⑤「例題」の各自の分担問題を1分で解答。⑥近くのグループの自分と同じ問題を解いた者と2分間「情報交換」。⑦1分ずつ自分のペアに、「情報交換」した内容等を参考に、解説しながら正解を伝え、ペアが正しく記入できたか確認。その後、必要に応じて全体での答え合わせの実施。⑧「ペアワークシート」の交換、予習判定欄に4段階(◎○△×)で評価しサイン。⑨筆者が再度、必要事項等を「情報提供」し、④と同様に記録。⑩「振り返り問題」の分担問題を1分で解答。⑪⑥と同様に2分間「情報交換」。⑫⑦と同様。⑬全体で、当日の学習のポイントを口頭で確認。⑭「ペアワークシート」の振り返り判定欄に、4段階(◎○△×)で評価しサイン。⑮ペアに「ペアワークシート」を返却、自分の「ペアワークシート」の気づき欄1～3に、学習での気づきや反省等を記入。

ピアノおよびピアノ弾き歌い：①講義開始前に「練習計画・振り返りシート」の所定欄を記入し、「成果発表」開始時間をペアと相談して決める。②「実施計画」欄に沿って練習し、ペアと「成果発表」。③「練習計画・振り返りシート」をペアと交換し、成果発表欄に4段階(◎○△×)で評価、評価理由を書いてサイン。④自分の「練習計画・振り返りシート」に練習内容、感想等を記入して提出。

4)実践で得られた成果

予習の「情報交換」は教科書を見ずに、自作の「予習ノート」や「ペアワークシート」を見て行ったが、中学や高校のプリント教材等を持参する者、また、正直に「わからなかったが、教科書に○○という言葉があったので意味を調べた」等と発言する者も見られた。このことから、何も話せないとペアに迷惑がかけると感じ、理解しようと努力した学生が多かったと考えられる。

問題を解いた後に行う「情報交換」は、ペアに正解と理由を伝えなくてはならないため、非常に活発に行われた。ペアに伝えるときには、初めは音楽の得意な学生に聞いたことばどおりに伝える者もいたが、次第に「自分のことば」で説明できるようになり、ペアに「すごくよくわかった」と評価してもらえたときには、ペアワークシートの気づき欄に「理解してもらえて嬉しかった」と記す者が多くなった。このことから、ノートやワークシート等には、筆者や友人の言ったとおりにではなく、後から見て理解できるように「自分のことば」で記せ、学習の内容を自分なりに整理・記録できるようになったと考えられる。

第2回の「音楽理論確認調査」と第11回の「音楽理論試験」との得点を比較すると、90～100点(6%から10%)、40点台(11%から15%)・30点台(3%から11%)が増加し、20点台(7%から5%)・10点台(6%から2%)と9点以下(1%から0%)が減少し、学年平均は3.4点上がって63点であった。クラスの76%が初心者というクラスでは、「確認調査」は学年平均点を6.9点下回ったが、「試験」は2.8点上回った。クラスの平均点も13.1点上がり65.8点であった。

常にミーティングの状態であるため、居眠りや私語をする者が一人もいなくなった。このことから、集中して講義に臨めたと考えられる。筆者は、この「情報交換」時に、一斉授業形式ではできにくい机間巡視が常に行え、学生の理解度を確認することができ、適切な「情報提供」ができたと考ええる。

ピアノおよびピアノ弾き歌い：「成果発表」を毎時間実施するので、熱心に練習する者が多く、また、音楽理論で多くの「ペア」と学習しているため、学生同士で疑問等を解決する姿も多く見られた。事前に実施計画を立てて練習を行ったので、課題を明確にして練習できた学生が多かったと考える。

第11回の「ピアノ試験」では、50点台(21%)・60点台(30%)が最も多く、第15回の「ピアノ弾き歌い試験」では、80点台(8%から56%)の学生が増加した。このことから、協同学習による練習方法が学習意欲を高め、積極的に取り組んだ学生が多かったと考える。少ない時間で全学生を一人ずつ指導するにはどのようにすればよいのか苦慮してきたが、学生同士での学びあい、高めあいを学習の過程で重視する協同学習を取り入れたことで、一人ひとりに時間をかけて丁寧に関われるようになったことが、最も大きな成果であると考ええる。

5)春学期の成果からの考察

音楽理論：理論終了時に実施した音楽理論についてのアンケートによれば、「毎時間予習をして講義を受けたか」には、83%の学生が「毎回予習」「ほぼ毎回予習」と回答したことから、協同学習によって学習意欲の向上につながったと考える。また、「ペア学習をどのように感じるか」には「一斉授業の方が楽しい」は4%、「一斉授業よりも楽しい」は75%で、「どちらともいえない」との回答は21%であった。

ペア学習を「楽しい」と感じた理由の例(原文)は、「話しながら、教えてもらいながら、教えながら…というのはほかの授業になく、楽しかった。わかりやすかった。」「1度組んだ子と組めないということで、普段話さない子と話すきっかけになって、楽しく授業を受けられた。」「ただ先生の話聞くだけでなくペアでやることで理解が深まるしい

いと思いました。また(中略)先生に直接聞くと緊張するけど、友達だと聞きやすいと思います。」等であった。

ペア学習を「どちらとも言えない」と感じた理由の例(原文)は、「ペアによってはわかりやすい場合も分かりにくい場合もある。お互いに話し合って理解できる場所もあってペアは良かった。」「先生の講義の時間も増やしてほしい。」「ペアを毎回変えるのはめんどくさいと思った。」「理論に時間がかかりすぎることがあって、先生に質問しづらかった。」等であった。

以上のことから、「学習習慣と意欲の喚起」は、概ね達成できたと考えられる。しかしながら、試験はさほど高得点だったとは言えず、学習意欲の向上=高得点とするため、短時間で理解度の高い学習(講義)方法の構築が必要だと思われる。

ピアノおよびピアノ弾き歌い：最終講義時の「実技ペア学習で学んだこと」の例(原文)は、「ピアノをペアでやることによって、ちょっとした発表みたいで、緊張感があって良かったです。完ペキに弾けた時にはうれしくなったし、できなかった時は、もっとがんばろう!という気になりました。また、友達からのアドバイスが自分にとって大きくプラスになりました。」「聞き合っている所をまねするというのを学びました。いろいろな感じで弾いている子がいるので、「こんな弾き方もあるんだ」と思いました(後略)。」等であった。

以上のことから、「学習習慣と意欲の喚起」は、概ね達成できたものと考えられる。しかしながら、自宅に鍵盤楽器のない学生や、多くの資格・免許取得のため、朝から夕方まで講義が詰まっている等の学生にとって、講義内でより多くの練習時間確保が、今後の課題であると考えられる。

6) 春学期「音楽Ⅰ」の問題点

以上のことから、「コミュニケーション能力と学習意欲を高める」授業作りは概ね達成できたものと考えられるが、学習意欲は高まったものの、理論や実技の成績が著しく伸びたとは言えず、学習意欲の向上が高い理解度には結びついていなかった。

秋学期以降の課題として、「①「学習意欲の向上」と「理解度の向上」を共に達成させる」「②短時間でわかりやすい音楽理論学習方法の構築」「③講義内でのピアノ練習時間の確保」の3点が示唆された。

秋学期の授業実践例

1) 学生の状況

実施学年は、2009年度S学部とT学部1年生50人で、春学期と同様に保育士資格、幼稚園教諭免許状や社会福祉士資格等の取得を目指す学生であった。クラスの人数はS学

部15人弱、T学部20人弱で、男子学生はS学部10人弱、T学部は各クラス2人であった。

高等学校での「音楽」未履修の学生は全体で30%あり、鍵盤楽器の「経験あり」の学生が65%、経験のない学生が77%というクラスがあった。ピアノ実技のグループ分けは、上級者19%、中級者38%、初級者43%。3人以外が全員初級者(77%)というクラスがあった。

2) 講義の概要

講義は、6回まではLTDによる音楽理論、7回目以降に実技。共に同じグループで行い、詳細は、「第1回 オリエンテーション、音楽歴調査、LTDグループ分け、予習の仕方説明」「第2回～第6回 音楽理論」「第7回 音楽理論試験、ピアノ実技説明」「第8回～第10回 ピアノおよびピアノ弾き歌い」「第11回 ピアノ試験」「第12回～14回 ピアノ弾き歌い」「第15回…ピアノ弾き歌い試験」であった。

実技のグループ分け、ピアノや弾き歌いの実技、第1回の音楽歴調査は、春学期と同様の方法。

3) 授業の実施方法

音楽理論：①講義には、ミーティングの前後に記入する「ミーティング記録紙」、自宅学習で作成した「予習ノート」、学習課題を深めるための「ワークシート」、グループ構成員のミーティングへの貢献度を記入する「フィードバック用紙」等を使用。②「ミーティング記録紙」の〈事前調査〉欄に、予習の状態を記入。③教科書を用いず、「予習の仕方」に沿って作成してきた「予習ノート」を用い、「ミーティングの進め方」に沿ってミーティングを実施。④筆者が、「ステップ3」までで話題になっていた情報や最低限必要な事項等を「情報提供」する。各自「予習ノート」等に「自分のことば」を用いて記録。⑤「ワークシート」をグループで協力して完成。⑥必要であれば、グループ内で解決できなかったワークシートの問題を、近くのグループと協同で解決。⑦ワークシートの模範解答を見てグループで答えを確認し、不明な問題を解決すると同時に、必要事項を筆者が解説。⑧「ミーティング記録紙」の〈事後調査〉欄に、ミーティングの自己評価を記入。⑨「ミーティング記録紙」の所定欄に、グループ構成員のミーティングへの貢献度を記入し、「フィードバック用紙」に転記。⑩「ミーティング記録紙」の所定欄に、学習での気づきや反省を記入。⑪「予習ノート」と「フィードバック用紙」を提出。

ピアノおよびピアノ弾き歌い：①講義には、「練習計画・振り返りシート」、楽譜、「レッスンノート」等を使用。②開始前に「練習計画・振り返りシート」の所定欄を記入し、「成果発表」開始時間をグループ構成員で相談して決定。③<

実施計画欄に沿って練習し、時間になったらグループで「成果発表」。「練習計画・振り返りシート」の「成果発表」欄に、構成員の得点と評価理由等を記入。④「成果発表」欄の得点を、フィードバック用紙に記入。

4) 実践で得られた成果

音楽理論：春学期と異なり、1グループを4人程度で構成し、毎回固定した。また、構成員の中に1人はピアノ実技の中級者または上級者がいるように配慮した。鍵盤楽器等の経験者を中心に、ミーティングは春学期よりもスムーズに進められていた。このことから、理論がわからずに停滞する時間が無くなり、少ない時間を有効に使用できていたこと、また、回を重ねるごとに学生の声が高くなり、コミュニケーション能力が高まったと考えられる。

「予習の仕方」に沿って作成した「予習ノート」を毎時間集めて評価したことにより、しっかりとした予習と活発なミーティングができていた。時には、筆者が後で「情報提供」しようと考えている事項を質問するグループもあった。このことから、学習習慣が定着し、同時に学習意欲が高まったものと考えられる。

「ミーティングの進め方」のステップ3まで終了した後、ワークシートに取り組んだ。各人が黙々と解答するか、初めから全員で一緒に考えながら解答するかは学生に一任した。すると、課題によって変えていたグループがほとんどであった。このことから、リーダー(ピアノ実技の中級・上級者)が構成員の予習状況を判断してどちらの方法が解答しやすいかを考え、グループを上手にまとめていたものと考えられる。

第7回の「音楽理論試験」の平均点は73点であり、春学期の平均点と比較すると10点高かった。春学期に最も多かったのは80点台(17%)、秋学期は60点台(24%)だが、秋学期は50点以下が9名と少なく(18%)、90点より上の得点者が11名(22%)いた。このことから、LTDによる学習方法は、仲間との話し合いを通して学習課題の理解を深められ、初年次教育の目的の一つである「学習の動機づけ」が達成できたと考えられる。

春学期は「情報交換」に時間を割いていたので、グループ内での話し合いの時間が少ないと感じていた。そこで、秋学期は問題解決もグループ内で行ない、90分間全てを理論にしたため、学生も納得するまで学習できたと考えられる。また、筆者も落ち着いて机間巡視が行え、学生の質問に丁寧に答えることができた。このことが、学生の高得点へつながったと考えられる。

ピアノおよびピアノ弾き歌い：理論学習でしっかりとコミュニケーションがとれていたことで、「成果発表」の時間

以外にも、常にグループ内で聞き合ったり、疑問等を解決したりする姿が多く見られた。春学期同様、事前に実施計画を立てて練習を行ったので、課題を明確にして練習できた学生が多かったと考えられる。第11回の「ピアノ試験」では、春学期は60点台が(30%)、秋学期では80点台(47%)が最も多く、第15回の「ピアノ弾き歌い試験」では、春学期では80点台(56%)が、秋学期では70点・80点台(45%)が最も多かった。このことから、LTDの「仲間同士の教え合い・学び合い」が授業の中心となった結果であると考えられる。

5) 秋学期の成果からの考察

音楽理論：理論試験後に実施した音楽理論についてのアンケートによれば、「毎時間予習をして講義を受けたか」には、89%の学生が「毎回しっかり予習」「ほぼ毎回予習」と回答した。S学部では「あまり予習しなかった」「全く予習しなかった」と回答した学生は皆無であり、意欲的に学べたと考えられる。

「予習がミーティングに役立ったか」には、94%の学生が「大いに役立った」「役だった」と回答した、また、「仲間からの貢献度評価は励みになったか」との質問には、93%の学生が「大いに励みになった」「励みになった」と回答した。このことから、構成員が活発に対話することでミーティングが活性化され、多くの情報が得られると感じ、積極的に予習に取り組んだ学生が多かったと考えられる。

「LTD学習法をどのように感じるか」には「一斉授業の方が楽しい」は3%、「一斉授業よりも楽しい」は72%「どちらともいえない」は22%であり、春学期とほぼ同じような比率であった。LTDを「楽しい」と感じた理由の例(原文)は、「いつものメンバーとは違う人達とグループを組んでみて、よりよい人間関係が作れたと思う。(中略)自分だけで勉強しているよりわかりやすくなった。」「(前略)自分も皆に言えたり、役に立ってもらえたからすごく嬉しかった。(後略)」「(前略)わからないところをみんなで考えるので一人よりもやる気、考える気が起きる。」「協同学習によって自分が自主的にやらなければならないという気持ちが高まった(後略)。」等であった。

LTDを「どちらとも言えない」と感じた理由の例(原文)は、「みんながあいまいだとそのままになってしまうところがあるから、ミーティングもよいと思うけど先生に教えてもらった方がいいと思った。」「(前略)よかったと思った点は、友達と協力し合える点や、自分からすすんで授業に取り組める点などです。もし、普通の授業だったら、音楽の知識があまり身につけていないような気がしました。悪かった点は、発言できない人がいることです。」「いつも一斉授業はつまらないと思っていたが一斉授業も大切なんだ

と感じた。」等であった。

以上のことから、課題1「学習意欲の向上」と「理解度の向上」を共に達成させる、2)短時間でわかりやすい音楽理論学習方法の構築は、概ね達成できたと考えられる。しかしながら、一つのグループに丁寧に解説していると、他のグループに関われなくなり、未解決のままミーティングを終了させてしまう等の問題点が見られた。

ピアノおよびピアノ弾き歌い：最終講義時の「実技の練習で学んだこと」「成果発表で学んだこと」の例(原文)は、「自分実力がどのくらい伸びたかというのを確認できた。毎回毎回やることで、(中略)講義に集中して目標に向かってがんばる気持ちを学ぶことが出来た。(後略)」「(前略)一曲全部出来た時には、感動して友達や家族に聞かせるほどうれしかったです。(中略)「継続は力なり」というのがわかった気がしました。」「(前略)最初は楽しむ(原文)も読めなかったのに、今では、歌までも歌えるようになりました。」「ピアノはひとりで練習するものだったけど、刺激を受け合ってやるのもいいと思った。努力することを学んだ。」などであった。

以上のことから、課題3)講義内でのピアノ練習時間の確保は、おおむね達成できたものとする。しかしながら、少ない時間で多くの曲を演奏できるようにするため、練習曲を指定する方法を構築することなどの問題点が見受けられた。

6)秋学期「音楽Ⅰ」の問題点

以上のことから、3つの課題は概ね達成できたものと思われる。しかしながら、予習で必ず学習すべき項目を指定しなかったこと、演奏する前になぜ理論の学習が必要なのかなど、細かな指示が出せていなかった。そのため、課題によってミーティングがスムーズに進まなかった等の問題点が浮き彫りになった。

今後の課題として、「①予習すべき事項を可視化する」「②学習事項の必要性を説明する」「③練習する曲目を精査し、体系的に学べるよう構築する」の3点が示唆されたと考える。

おわりに

高等学校までの学習は、記憶(暗記)をすることが中心であり、授業は「一方向型」で行われることが多い。しかしながら、社会で必要とされるのは、単なる知識ではなく、獲得した知識を応用・活用する力である。このような力をつけるために、初年次教育を実施している多くの大学では、PBL (Problem/Project Based Learning) とグループワーク

が取り入れられている。PBLは、自分で問題を発見して解決していく学習法、グループワークは、問題発見や解決を討論等で学んでいく学習法である。これらの学習方法によって、受動的な学びから能動的な学びへと変わり、同時にコミュニケーション能力等も高められていく。

以上のことをふまえ、ペアやグループで他者と関わりながら、音楽を効果的・継続的に学習する方法を探りながら、受け身型の「一斉授業」ではなく、教師と学生の双方向に加えて、さらに学生相互のやりとりを含む「三方向対話型授業」で1年間指導を行った。音楽の授業における協同学習の意義は、仲間と「心の交流」をしながら音楽のよさを共有し、楽しさや学習を深めていくことである。たとえば、理論の基礎知識を獲得することで、敬遠していた読譜ができるようになり、積極的に練習するようになる。また、仲間の演奏に耳を傾けられるようになり、新たな表現へとつながっていく。

しかしながら、ただペアやグループになったからと言ってよい協同学習はできない。授業中に仲間と話し合うという経験は決して多くない。秋学期最終講義時のアンケートによれば、「今までに協同学習(ミーティング)による授業を受けた経験はあるか」の質問に、41%が「まったくない」と回答している。一方で、「単にグループを作って作業をする」「手抜きをする者が多い」といった、グループ学習によるイメージを持っていない学生もいる。このような学生が無理なく参加できるようにするためには、雰囲気作りが大切であると考え、本実践ではアイスブレイキングとして、春学期・秋学期共第1回にミラーリングによる自己紹介を行った。方法は、①「Aが自己紹介をし、誰かを指名する(例: B)」、②「Bは、Aの自己紹介を述べ直す」、③「Aは述べられた内容をチェックする」、④「Aから合格をもらえたら、Bが自己紹介をする」、⑤「BはAも含めて誰かを指名する」、⑥「②～⑤を繰り返す」、⑦「全員終了したら、全員が一人ひとりの名前が言えるのかを確認する」である。

各自1分の持ち時間で行ったが、笑顔で参加する学生がほとんどであった。この活動により、初対面の仲間とも打ち解け、スムーズな学習活動へ移行できたと考える。

授業を進める上で「配慮の必要な学生たち」、すなわち「特別支援教育」を無視することは出来ない。何らかの理由で理解度の低いとみなされてきた学生たちは、高等学校までの学習において、「クラスの厄介者」と扱われてきた者も少なくない。様々な困難を「学習の多様性」と捉えることで、協同学習は、「配慮の必要な学生たち」にとって有効な学習法と言える。そのような学生でも無理なく学習に参加できるように、本実践では、①コミュニケーションの取りにくい学生に配慮し、少人数(春学期は2人、秋学期は4

人程度)での学習の実施し、②集中力の乏しい学生に配慮し、短時間で次の作業に移る(春学期はこまめな「情報交換」、秋学期は1つの作業を5分程度に設定してのミーティング)学習の実施、③先が見通しにくい学生に配慮し、すべきことや手順がわかるような学習(春学期は「ペアで学習→他のペアと情報交換」の繰り返し、秋学期はミーティングの進め方のマニュアルを配布)の実施、④聴覚入力不得手な学生に配慮し、視覚入力を優先して、課題が明確になるように「ワークシート」と「練習計画・振り返りシート」を導入、⑤セルフ・エスティームの低い学生に配慮し、達成評価がしやすいよう、「練習計画・振り返りシート」を導入。また、スモール・ステップの繰り返しができるよう、「ワークシート」は必ず解答できるような問題を出題、⑥板書が写しにくい学生に配慮し、板書はほとんどせず、「ワークシート」や「予習ノート」等を使用しての説明等の実施、といった配慮を行った。

これらの配慮により、残響の全くない構造の音楽室での閉塞感に慣れず、何度か過呼吸を起こした学生がいたものの、大きな問題が起きることはなかった。それどころか、秋学期の最終授業時アンケートの質問項目「また協同学習(ミーティング)による学習を行いたいと思うか」には、98%が「おおいに思う」「少し思う」と回答した。協同学習による学びは、「配慮の必要な学生たち」だけではなく、そうではない学生にも有効な学習法であると言える。

初年次教育の大きな目的は、目標に向かってのスタートとなる初年次を「学習の土台」と位置づけることだと考えられる。そのため、少ない時間で学習効果が上がるよう授業時間以外に学習の習慣をつける必要がある。そこで、春学期には書式指定しなかった「予習ノート」を、秋学期には「作り方」を指定して予習の定着を図った。学習意欲の高い者の方が、学習効率が高く(亀田ら, 2006)、学習内容が難しいと感じている学習者は学習意欲が低い(室井, 2006)ので、効率よく知識と技術を習得させるためには、わかりやすい指導で学習意欲を喚起することが大きなポイントであると思われる。秋学期最終講義時アンケートの質問項目「自分の学びが仲間の学びに、仲間の学びが自分の学びになったか」には、98%の学生が「おおいになった」「少しなった」と回答した。このことから、協同学習が初年次教育には有効な手段であり、音楽を効果的・継続的に学習させる方法としても大いに役立つと考えられる。

一斉授業ではない形態での実践科目の講義は、学生にとっても指導者にとっても新たな発見の連続であった。何よりもTTT (Team Then Teacher)の姿が見られたことが、大きな成果である。「先生に聞く前に仲間に聞く」ことは、指導者に聞く前に他のグループにも聞くことであり、クラ

ス全体の一体感をも促進できる。まさしく「仲間が一番」である。

日本の初年次教育は、T大学でも行っているような「オリエンテーション」などが多く実施されている。これらは、スチューデント・スキル、ソーシャル・スキルであり、さらに、セルフ・エスティームとしてまとめられるものへの期待も高い。残念ながら日本では、このセルフ・エスティームを伸ばす教育が重視されていなかった。「大学のユニバーサル化」(友野, 2010)、社会の変化やそれに伴う学生の変化等に対応できるような「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」(中教育審大学分科会制度・教育部会, 2008)を早急に構築するためには、多彩な科目を組み合わせる等の必要があると考える。

文献

- 青野 透(2008):初年次学生の学習動機付けを支える理論と仕組み. In: 東北大学高等教育開発推進センター(編), 大学における学びの転換とは何か. 東北大学出版会, 仙台, p113-125.
- 中央教育審議会(2008a): 学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ).
- 中央教育審議会(2008b): 学士課程教育の構築に向けて(答申).
- Barkley, E. F., Cross, B. K. and Major, C. H. (2005): Collaborative Learning Techniques: A Handbook for College Faculty. Jossey-Bass, San Francisco.
- 石橋裕子(2009a): 学習意欲を高める授業作りー協同学習の考え方に基づくペアワーク等を用いた『音楽Ⅰ』の授業実践. 全国大学音楽教育学会第25回全国大会論文集 p24-25.
- 石橋裕子(2009b): 学習意欲を高める授業作りー協同学習の考え方に基づくペアワークを用いた『音楽Ⅰ』の授業実践. 日本協同教育学会第6回こうべ大会論文集 p87-88.
- Jacobs, G. M., Power, M. A. and Inn, L. W. (2002): The Teacher's Sourebook for Cooperative Learning: Practical Techniques, Basic Principles, and Frequently Asked Questions. Corwin Press/Sage, London.
- 亀田健一・金子隆昌・村上周三ら(2006): 学習環境におけるプロダクティビティ向上に関する研究(その13): 学習効率に対する温熱環境の影響に関する現地実測. http://www.arch.t-kougei.ac.jp/ito/pdf/14_2006.pdf.

- 松本茂(2009)：初年次教育の学問的基盤に関する考察－コミュニケーション教育学の可能性－。初年次教育学会会誌 2, 48-55.
- 水原克敏(2001)：自分－私がわたしを創る－。東北大学出版会, 仙台.
- 室井 明(2006)：やる気も双方で！英語教育 2006年1月号, 14.
- Rabow, J., Charness, M.A., Kipperman, J. et al. (1994) : William F. Hill's Learning Through Discussion. Sage, Thousand Oaks.
- 関田一彦(2004)：協同学習のすすめ－互いの学びを気遣い合う授業を目指して－。杉江修司・関田一彦・安永 悟ら(編), 大学授業を活性化する方法. 玉川大学出版部, 東京, p57-106.
- 杉江修司(2004)：学生の参加を促す多人数授業. 杉江修司・関田一彦・安永 悟ら(編), 大学授業を活性化する方法. 玉川大学出版部, 東京, p9-55.
- 友野伸一郎(2010)：対決！大学の教育力. 朝日新書, 東京.
- 山田剛史・森朋子(2009)：Evidenceに基づく初年次教育プログラムの構築－モデル授業の効果検証を踏まえて－。初年次教育学会会誌 2, 56-63.
- 安永 悟(2006)：実践・LTD話し合い学習法. ナカニシヤ出版, 東京, p.112, 135-136.

Research on Teaching of Music using Cooperative Learning in the First-year Experience of University

Yuko ISHIBASHI

Junior College, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San' o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Present affiliation : Faculty of Child Science and Education, Teikyo University of Science

Abstract : This report presents the results of the teaching “music I” to the first-year students of T-university. In this class, cooperative learning techniques were conducted. Pair learning was carried out in the spring semester class, and LTD discussion learning method in the fall semester class. In the spring semester, enhancement of the communication skill and motivation of students was almost established. However, the issues were as follows: 1) theory and practical results were poorly established, and 2) the motivation failed to boost the understanding. In the fall semester class, the purpose of class was generally achieved. However, the issues were as follows: 1) the items which should be learned in preparation were always not specified, 2) the instructions how to play and why need to play were insufficient, and 3) the challenge meeting failed to advance smoothly.

(Reprint request should be sent to Yuko Ishibashi)

Key words : First-year university class, Cooperative learning, Pair learning, LTD (Leaning Through Discussion), Music I class

